



○取材協力 NPO 法人 森は海の恋人 和船あずさ丸復活プロジェクト (アサヒグループホールディングス株式会社支援事業)

▲唐桑・舞根の海に浮かぶ大勝造船建造の和船。

テランの千葉さんの頭の中には、 をもとに船を造るわけだが、大べ

から複雑な立体



▲千葉さんが自ら作った和船の模型。





▲バーナーで熱しながら板を曲げていく。



<u>▲</u>船の形が見えてきた。

唐桑、気仙沼、雄勝、石巻、 がら、 船の町でもあるのだ。 歌津はもちろん、下北、 きた。震災でほとんどの 町のNPO法人森は海の 福島県などから集まって 40人以上の従業員がいた 船が被害を受けた南三陸 いたそうだ。南三陸は造 りを復活させた。 こともあった。 町。大勝造船も被災しな 震災後、気仙沼市唐桑 かつて、大勝造船には 直後から再び船造 船大工は

2隻の和船が津波で流失したた 和船を造れないかという打診が 恋人の畠山重篤さんから 畠山さんは牡蠣養殖を営む漁師だ め、再建したいとのことだった。 あった。畠山さんが保有していた

ている。和船は、漁師が山に木を 舟の材料を育てるためであったこ 植えることは、次世代が使用する まさに「海に浮かぶ森」だと考え

> た工程は、今で いる。 もっともむ

という。厚さ7・5センチ、幅90 センチの板の2カ所をジャッキで ずかしいのは船底だ

自ら室根山に植樹を続けて来た。 水がつくるという理念のもとに、 豊かな森から流れ出る滋養豊かな が、おいしい牡蠣が育まれる海は、 は教科書にも掲載され、世界中の 森は海の恋人」というエッセイ

最後に造った

このは、チリ地震津波

がりを表す象徴なのだ。

・れる。山と海のつな

千葉さんが父親とともに和船を

木を組み合わせて造る木造船は、

が元気なうち

にもう一度和船を作

できるだろう

か。不安でもあった

れ以来久しく造っていない和船が に襲われて数年後までのこと。そ

人々に大きな影響を与えてきた。 畠山さんは、さまざまな樹種の

その型は美しい曲線を描いてい

た。複雑な曲線が何本も走る図面

語る。船のさまざまな部分の型が

ための型を前に、千葉勝司さんは んだよ。」とFRP製の船を造る

頭の中で船はもうできている

工場には無造作に置かれていた。

たいとかねがね思っていた。そ こで、 船を専盟 門に造っていた志津 かつて大勝造船で和

船建造 いを依頼 の佐芸 に挑むことを決心し 頼し、40年ぶりの和 藤美佐夫さんに手伝

Katsuji Chiba

を続け 県一関· かった。 材料に を歩い 探し始 歌津の日 年ほどの杉を5本切り出し、 てもらっ は、まさに畠山さんが植樹 千葉 て来た室根山(岩手 たが、なかなか船の めた。南三陸町の山 さんは和船の材料を 阿部製材所で製材し 市) だった。 樹齢百 なる木は見当たらな 材料に出会ったの

まった。 2013年12月、造船が始

は自ら作った模型で、 りについて説明して さを出していく。千 は船底を4等分して、 昔、父親と作業し

でも体にしみついて

葉さんは 和船造 幅と高い

船の名前になった 水止めをす 舞根漁港で進水した。船の櫓に使 われる堅い木である「あずさ」が、 の美しい和船「あずさ丸」は20 14年3月末、 こうして、 千葉さんのもとには、

気仙沼市唐桑町宿

和船の修

出したことはない。どうするか考 えなければならない。何にでも対 「どうすればいいか、本当に困る るカッコ船の修復など、 んだよ。でも、いまだかつて投げ い仕事が持ち込まれる 復や底板を丸太からくりぬいて造 むずかし

応するっていうことが、職人だか 船技術、海と山のつながりを感じ 消し、船や櫓を造る技や知恵、 若々しく輝いていた。和船が姿を る機会も失われようとしている。 船の話をする千葉さんの顔は

千葉さんは、貴重な三陸の海の文

化を継承する一人だ。

技だ。 センチほど持ち上げて反らせる。 その微妙な曲線を作るのは熟練の おさえながら、徐々に木の端を20

緊張する。魚油を塗って、バーナー まし曲げていく。この船の「みょ 違えると、木が割れてしまう。つっ うし」と呼ばれる船首にはヒノキ ぱり棒を入れて、 がら木を曲げていく。少しでも間 で厚さ4センチの板をあたためな のみでだましだ

と板の間をヒワダを打ち込み水を を使わず木ごろしとノコを通して 止め、堅牢にする。和船はヒワダ

全長12・5メートル

上の船を海に送り出して 目だ。これまで四百隻以 けてきた大勝造船の2代 陸町志津川で船を造り続

千葉さんは75歳。 南三

いるというわけである。 である船がすでにできて

が使われた。 船ができたら大型の木造船は板 船首の側面の曲線を作るときも

# "Forests Floating on the Sea" Iding a Japanese-style boat

Ms. Sayoko Sato is ninety-one years old. Her husband, Takeshi, is a self-taught carpenter who builds shrines and temples. In 1950, he built his first structure, the Mirokuji Temple in Nakada-cho, Tome City and since then, has made a total of about 200 shrines and temples. In 2007, he was selected as a "Contemporary Master Craftsman".

Sayoko was always there beside Takeshi and took charge of cooking three meals a day for all the carpenters and workmen working at sites throughout Japan where he was engaged in building a shrine or temple. She not only cooked but also drew pictures on the vanes of arrow wheels used in ridgepole-raising ceremonies and pictures on the ceilings of temples.

Pictures nearly 2 x 2 m in size were drawn on fetching vanes. A crane was drawn on one vane and a tortoise on the other vane for the ridgepole-raising ceremony. Sayoko drew as many pictures as the buildings that her husband constructed, spending more than a week for each set of pictures drawn on the vanes. Each arrow wheel is kept above the ceiling of each building with the names of the husband and wife, written on them.

When the Daioji Temple in Minamisanriku underwent large-scale repairs in 1957, Sayoko drew 160 pictures of lotus flowers on the ceilings of the mortuary chapel. On a 45 x 45 cm piece of board, she drew the life cycle of the lotus, from the moment it was a bud, followed by its blooming into a beautiful flower, and finally withering and dying. Sayoko reflects upon the days when she spent many hours drawing, saying, "Sometimes I drew pictures while cooking rice, and at other times I dozed off while drawing."

Sayoko has drawn a great many pictures on the ceilings of buildings. However, not everything went smoothly in her life. At one time, they happened to fall into debt because of a rise in material prices. At another time, when her husband was constructing a shrine in Hokkaido and told her to send pictures for the shrine ceiling, she took out ceiling boards of their own house, drew pictures and sent them since she could not obtain the wooden board necessary for drawing on.

Sayoko laughs, saying, "I am unexpectedly daring." Although Sayoko still lives in a temporary housing unit, what keeps her spirits up is the pride she feels in the work that she and her husband have accomplished so far. The buildings that her husband constructed together with the artwork created by his wife will survive long into the future as a place of prayer for countless people.



▲さよ子さんが描いた大雄寺位牌堂の 160 枚の天井画。



▲蕾み、開ききって枯れる前の蓮など花はさまざまな表情だ。



▲語り尽くせないほど苦労があったと言うさよ子さんだが、その笑顔は仏像のように穏やかだ。



▲上棟式の際に屋根の上に飾る「鶴」の矢車。



▲「亀」。大きさは畳2畳分ほどもある。

大雄寺の山門の修復もさよ子さんの夫 佐藤猛棟梁によって行われた。

佐藤 さよ子さん 絵師 Sayoko Sato

物の数、さよ子さんはる大きな絵だ。猛さん 以上もかかる矢車を描いてきた。こ物の数、さよ子さんは制作に一週間 そこに記されたご夫 の矢車は、それぞれ

に眠っ 大 32 の 大 陸 改 年 昭 雄 町 南 修 の 和 寺 の 三 ている。

産み出る

された建物は、多くの人々の

支えている。夫唱婦随で全国各地に ふたりで成し遂げた仕事への誇りが

祈りの場として、これからも長い間

亀の絵は、1枚が畳二上棟式の矢車に描か んが手がけた建 の家の天井に、

婦の名前ととも 一畳分ほどもあ

災の津波で、最後に手がけた名取の 造をやったりしたこともあった。震 の暮らしが続く。 い。自らも被災し、 寺が被災し解体されたことは悲し よ子さんは笑う。 しかし、 家業以外にも飲食店や電子部品製 さよ子さんの心を、夫婦 南方仮設住宅で

在まで志津川で生きて来た。猛さんは復員後、独学で寺社仏閣を建てる宮大工になった。昭和25年、最初に手がけた登米市中田町上沼の弥勒寺以来、これまでに手がけた寺社は約200件にのぼる。平成19年には現代の名工にも選ばれた。特に横山不動尊山門修復工事で、山門の腐食した柱を建物を解体せずに修復した半つばめ止めという技術は、多くの人を驚かせた。

全国各地の建設現場で飯場を担当し、大工や職人たちの三食、風呂焚きなどを賄ってきた。それだけではない。猛さんが手がけた建築の上棟ない。猛さんが手がけた建築の上棟ない。猛さんが手がけた建築の上棟ない。猛さんが手がけた建築の上棟ない。猛さんが手がけた建築の上棟ない。なるの天井画などを描いてきたのである。 かれている鶴と 海道の神社建設の折り、天井画を送 「私、意外に大胆なんだでば」とさ 手に入れることができなかったさよ 子さんは、自分の家の天井板をはず れという夫の連絡に、絵を描く板を して絵を描き送ったという。

で借金を背負ったこともあった。北 な時だけではなかった。資材の高騰 さよ子さんは描いた。しかし、 以後、さまざまな寺社の天井画を 順調

の兵隊だった佐 居眠りしながら描い いるのを見て、 改修の際に、 とさよ子さんは振り返る。大雄寺の 枚1枚描いた。「ご飯を炊きながら、 井画を160枚描いた。 のときに位牌堂の天井に蓮の花の天 た飯場にさよ子さんも寝泊まりし 板に、つぼみから美しく花を咲か この改修を支えた。そして、そ やがて枯れていく花の一生をし 図鑑などを見ながら絵柄見て、蓮華の花を描こうと 襖に蓮の花が描かれて たもんだった。」 45センチ角



▲プレス機で凹凸をつけてきりこ はがき完成。現在は8種類。





パルプ



- 乳パックの印刷面をはがし ▲紙をすく。 丁寧に丹念に、 を均等に行き渡らせる。

▲ステンシルに慎重にインクをたた いてイラストはがき完成。

This spring, a "care support office" for the physically challenged, "NOZOMI Welfare Workplace," will start operations under the name "NOZOMI PAPER Factory." They are planning to produce high quality commodities. Their main products will be postcards made from recycled milk cartons. Specifically, they include lovely, decorated postcards made with a stencil printing method and postcards with embossed patterns used in the KIRIKO Project that women in Minamisanriku have been continuously engaged in since before the disaster. They are targeting a business with a steady production of high quality

The Able Art Company is expanding their activities to assist the physically challenged to work in the field of art and design and help them find a way to become independent. Staff members from the company visited Minamisanriku and found great potential among the various works of art drawn by the physically challenged at the NOZOMI Welfare Workplace. Attendants of the workplace are gradually finding pleasure in expressing themselves through praise from others for their work.

The sales of towels with "Moai" designs and postcards are satisfactory and a small extra allowance was paid out to the workers. Mr. Shinya Mori, a staff member of the NOZOMI Welfare Workplace says that the corporation hopes to continue operation and provide a place for communication among attendants of the workplace and maintain a sufficient level of wages for its

In February of this year, the "KIRIKO postcard" was completed as a "commercial product" under the cooperation of ENVISI, an organization that sponsors the KIRIKO Project, and Able Art Company. They are aiming to start a program in which stores would receive a commission through the limited sales of postcards with special patterns designed by the women of Minamisanriku. These designs would be based on stories of shops and families in the town.

"In the future, we want to make a map of stores selling our products so that customers will visit the stores one by one, and this will lead to revitalizing our local businesses," Mr. Mori says hopefully.

At present, the Factory is comprised of 21 members. The members are looking forward to a new start this spring.

社会福祉法人「洗心会」 のぞみ福祉作業所 vice corporation Senshinkai's "NOZOMI PAPER Factory" の高い商品を安定的に生産して行け 彫りのような凹凸を付ける加工) ジェクト」の絵柄をエンボス(浮き わいいハガキや、町の女性たちが震 るように事業化していく予定だ。

出していった。自分が描いたものが 他者から認められることで、表現す 地でも展開していた。カンパニーの れるように、アートやデザインを通 スタッフが、利用者のみなさんが描 きがいをもって、自分らしく生きら 害者の新しい仕事を作り、 **売信する活動を続けている組織。** ょりが経った頃、エイブルアートカ で作り続けて来た。震災から一年あ . たさまざまな作品の可能性を引き パニーと出会った。エイブルアー カンパニーは、障害のある人の 震災後、同所では手作りのハガキ トを、デザインを通して社会に 震災後は被災 彼らが生

ときりこプロジェクトを主催す のお店や家々の物語をヒントに作っ 完成した。。町の女性たちが南三陸で、「きりこはがき」が商品として ENVISI と南三陸の女性たちの協力 入るというしくみを目指している。 で販売してもらいお店にも手数料が た絵柄をハガキにし、そのお店限定 いずれは、販売しているお店のマッ る作品として、この春新たな発信 れしい。」と森さんは期待している。 に作られた紙が、南三陸の心を伝 商店の活性化にもつながれば

み福祉作業所のスタッフ森 伸也さ んは、利用者のみなさんが、仕事場 収入を維持できるようにして のぞ



のぞみ福祉作業所では、利用者たちが描いた絵のスタンプを生成りの トートバッグにスタンプしてオリジナルバッグを作る「オスタバッグ」 ワークショップも南三陸福興市などに合わせて開催する予定。

今回、エイブルアートカンパニー

お問い合せ のぞみ福祉作業所 TEL 0226-46-5129 http://www.nozomipaperfactory.com《近日オープン予定》

品のディレクションと世に送り出す

プロモートを担当してきたのが小野

ふたりは「M&B」というローカ

彼の力強く繊細なタッチの作品を目 を描き続けて来た。南三陸町民なら

小山さんは毛筆で独特の文字と絵

にしている人も多いはずだ。その作

同級生だ。高校のころからひげ面



です。この言葉を背中に、前向きに が、復旧作業に励む南三陸の人たち その言葉をプリントしたTシャツ 自然に生かされ 自然に奪われ それ に出したころ、震災が起きた。 てもここで暮らしたい』小野寺さん ふとこの言葉が浮かんだ。 ムになればと思ったん

られないくらい緊張するのだとい を小野寺さんに見せるとき、 んはその過程で自分が鍛えられ え?これって南三陸で作ら ルな仕事をしていくことを一 ふるさと南三陸を拠点に、グ 小野寺さんに見せるとき、顔を小山さんは今でも創り上げた作 小

が記されたTシャツが二人の記念す のTシャツを販売してくれることに 仙台のショップのオーナーが、店の 002年、小野寺さんの知り合いの ルブランドを大切に育ててきた。 なった。アルファベットを毛筆で描 オリジナルブランドとして、M&B た。「笑顔」と「継続」という言葉 た無国籍なデザインが人気を博し 以来、150アイテムの作品を世 表現し続けて来た。

思った。その思いは「Rising 3riku」 というデザインになった。南三陸の あちこちで、ボランティアさんへの 感謝の気持ちを表した二人の作品に 出会う。いずれにしても、南三陸の は昇りやがった」と小野寺さんはものように昇った。「それでも太陽ものように異った。「それでも太陽 た町への思いが凝縮している。

東山のツツジ、タコの吸盤、サ 字筆がすり切れるような筆圧で描 鱗をデザインした。自分たち<mark>を育て</mark> も描かれている。袖にプリント 「南三陸」の「三」の字には、 小山さんはその言葉を一文字 生き生きした線で田東山と ケ、さ荒描一の田れ島い文 か 切 悔

Mr. Kei Onodera and Mr. Yasuhiro Oyama make up the group "Mustache and beard." They were classmates in high school and both have had their mustache and beard since then, giving rise to their name. Thirteen years have passed since they started their unique activities.

康博さん 小野寺敬

М&В suhiro **Q**yama Kei Ono<mark>de</mark>i

Mr. Oyama has continued draw distinctive characters and

pictures with a brush. Mr. Onodera has directed and promoted the works produced by Mr. Ovama. "Nature allows us to live but can also take everything away from us. Even knowing this, we still wish to live here." This phrase aptly describes how Mr. Onodera felt after the disaster.

"Therefore, I decided to make a T-shirt with these words printed on the back and hoped that it would become the "uniform" for the people of Minamisanriku as they strived to recover. We believed that wearing this T-shirt would give people a positive outlook. The people of Minamisanriku were prepared for hardships after the disaster. Some decided to remain here, preparing themselves for the worst, and some decided to leave this town with strong feelings of regret at not being able to live here. I think every person felt uncertainty about their future," he recalls. Yasuhiro writes calligraphy with strength and dynamism. The Chinese characters for Mt. Tatsugane and Arashima Island are drawn with lively lines. For the character " 三 "(san) of " 南 (Minamisanriku)," which is printed on the sleeve, azalea blossoms from Mt. Tatsugane, octopus suckers, and salmon scales were used for the design. His heartfelt gratitude to the town that raised them went into creation of the T-shirt.

Kei and Yasuhiro have continued to express what is in the hearts of the people in Minamisanriku. Both of them hope to carry out activities on a global scale with their hometown of Minamisanriku as their base. I feel that I am doing meaningful work," he says enthusiastically.



▲小野寺さんの心に浮かんだ言葉を小山さん が文字と絵で表す。田東山と荒島が見事な線 で描かれている南三陸町民の「ユニフォーム」。



▲町内のいろいろなところで出会う二人が 創った「感謝」の言葉。町を繰り返し訪れ るボランティアさんたちとの無言のコミュ ニケーションツールになっている。



▲巨石の割れ目を無事通り抜けた人は正直者!挑戦するときは通り抜けをサポートしてくれる同行者とご-

▲巨石のまわりに鎮座する「ツトコ明神」。旧暦の 10月 28日に集落の人々によって祀られる。人々 は代々、巨石を神のよりしろとして崇めてきた。







The entire boundary of Minamisanriku is mountain ridgelines. All the rain that falls on the town goes to the sea. There is a grand view of rich mountains that nurture the blessings of a bountiful sea, a marvelous view of a beautiful ria coast line ..

islands floating in the bay ... Surprising spectacles await us at the edge of Minamisanriku.

In a mountainous area in the Iriya district of Minamisanriku, there are megaliths that dot the landscape, appearing as if they had come down from the sky.

Granite that had been formed by cooling deep underground emerged on the earth's surface here in the Cretaceous Period through crustal changes, and eroded over millenniums. The area covered with sedimentary rocks remained a mountain and people settled in the eroded granite area.

The surface of the earth was dotted with huge lumps of granite which remained without being eroded, and the people in Iriya have deified the stones as gods and passed this belief from generation to generation. The stone was believed to be an object representative of a divine spirit.

The largest megalith is in the Ishinodaira district. It measures 5.5 m in height and 13 m in width and lies deep in the cedar forest. The megalith has three fissures which were caused by water entering into its cracks and undergoing years of repeated freezing and melting. A legend in Iriya says that those who are honest can pass through the fissures, and those who have evil thoughts cannot.

On 28th October according to the old-style calendar, the people of Iriya worship the "Tsutoko Myojin God" around this megalith. "Tsuto" made from rice straws represents a shrine. Once a year, the shrine is made anew for the god who resides there. It appears as though the small paper offerings and "Tsutoko Myojin God" are gazing at the people who visit here.

This is a mystical spot where you can feel the power of Mother Earth.

<神行堂寺山麓の巨石観賞のポイント>

①この山から見下ろす里山の景色を堪能する。②静かに耳をすませ、鳥の声を聴く。 ③春から夏にかけては、足下に咲く可憐な花々を観賞する。(5月にはウラシマソウが咲く。) この巨石にはさまざまな伝説がある。「弘法大師が霊場を開こうとした場所である」とか、

の巨石である。杉林の奥深く 浸食されずに残った花崗岩の巨 表に点在し、

ことができる南三陸きってのパ ぐり抜ける儀式をしたそうだ。 のパワーをダイレクトに感じる 入谷の子どもたちは成長の て、この巨石の裂け目をく

着いた。この二つの地質の境目

重なっているこの石の下を掘っていくと さらに七つの石が重なっていると言われ ている。林際のそば処すがわらのすぐ隣



昔この場所にはヨシが生い茂っていた。 それはとても質がよく、平泉にいた源義 経は、自らの笛のリードに、ここのヨシ を使ったという。五条大橋で吹いた笛も、 もしかして、入谷産?!





▲坂の貝峠のなまこ石 なまこそっくりの巨石。道の脇から現れた 巨大ななまこを刀で退治すると、翌朝二つ に割れた巨大ななまこの形の石が沢にころ



▲本吉明神のそばには小さな祠がある。 地元の人たちが代々、この巨石を大切に

南三陸町の一日も 早い復興を願いつつ いろいろな場所で いろいろな形で 今日もみんなががんばっている。

そんな姿を撮影する 写真家 浅田政志さんと 南三陸の人々との写真プロジェクト。 順調に撮影が進んでいる。 1枚の写真をどこでどう撮影するか を事前に浅田さんと話し合い 撮影当日にもみんなでアイディアを 出し合いながら、作品を創り上げる。

そこには 互いを思いやる人々の姿 南三陸のため、前向きにがんばる姿 人と人との間に流れる あたたかい気持ちが映り込む。

We are working hard together! For the recovery of Minamisanriku!

A photo project by photographer, Mr. Masashi Asada, and the people of Minamisanriku.

The subjects for the photographs are people who are working hard to do something for others. The project members are steadily undertaking the photography.

Before photographing, Mr. Asada and other members meet to decide what location and background to capture in the photo. On the day of photographing, while members meet and express ideas between one another, a single photography work is created. The photographs capture people who are sympathizing with others, people who are proactively working for the recovery of Minamisanriku, and images of warm thoughts and feelings flowing between people.

Everyone is working hard now at various places and in various ways while wishing for the earliest possible recovery of Minamisanriku. people elsewhere feel better.



# 浅田政志

写真家。1979年、三重県生まれ。日本写真映 像専門学校在学中より自身を含めた家族が被 写体となり、家族写真を撮り始める。その作 品を収めた写真集『浅田家』(赤々舎刊)が第 34回木村伊兵衛写真賞を受賞。国内外で個展、 グループ展を精力的に開催。著書には『NEW LIFE』( 赤々舎刊 )、『八戸レビュウ』( 美術出 版社刊)、『家族新聞』(幻冬舎刊)、『家族写 真は「 」である』(亜紀書房刊)などがある。

主催 ENVISI

共催 一般社団法人南三陸町観光協会

助成 公益財団法人福武財団

ASAHI RT Fサセクルーフ芸術文化制団 特別協賛 48411

# のぞみ福祉作業所

のは楽し

Social welfare service corporation Senshinkai's

"NOZOMI PAPER Factory"

We enjoy making paper products because we can make what we do best. We are pleased when people like our goods. We are happy because the staff made special curry for us today! We want many people to look at the pictures we drew. We hope that many wonderful items can be produced out of our



# 株式会社行場商店

Gyoba Shoten Co., Ltd

Gyoba Shoten specializes in the processing of salmon and trout. At the morning meeting, attended by all its workers, everyone imitates a "salmon." The fearless president of Gyoba Shoten, Masanobu Takahashi, holds two salmon in both his hands. The company's first factory was restarted in August 2011, 5 months after the disaster. Their second factory was completed 14 months after the disaster and resumed full operations. The company ships silver salmon raised in Miyagi, autumn salmon from Hokkaido and Sanriku, and trout from Chile to areas all over Japan on a daily basis.



# YES 工房~南三陸復興ダコの会

一陸の名産品であるタ

## YES Studio — Minamisanriku Revival **Octopus Society**

The staff of YES Studio gathers around "Octopus Boy," a popular character that resembles an octopus, a specialty of Minamisanriku. The studio, which remodeled the former Iriya Junior High School, is creating new products one after another that utilize the local resources of Minamisanriku. We wish everyone success and happiness together with Octopus Boy!



# 農漁家レストラン 松野や

作る料理が大好きが店にやってくる。が店にやってくる。 たちの喜ぶ顔が大好きおばあちゃん夫婦は孫 期ガンからのサバ 一枝子さんに元気をも 時々孫たち お客さん

Matsunoya,

a "farmhouse and fisherman's restaurant"

After surviving a bout with advanced cancer, Ms. Mieko Matsuno started to run a "farmhouse and fisherman's restaurant" together with her husband. Her two grandchildren come to the restaurant sometimes and they love the dishes prepared by their grandmother. Mieko and her husband cherish the pleased and happy faces of her grandchildren. Visitors joyfully come to the restaurant to be uplifted by Mieko and her miraculous recovery.

# 季節料理志のや



三陸沿岸で採れたエゾアワビが丸ごと1個 のっているという、春満開の豪華丼です。

料金 /¥2,000 営業時間 /11:00 ~14:00、17:00 ~21:00 定休日 / 水曜日 電話 /0226-47-1688 所在/宮城県本吉郡南三陸町志津川字御前下59-1 南三陸さんさん商店街内



# 南三陸竜巳や



春野菜と新鮮なメカブの美しい緑が、色 とりどりの海の恵みを引き立てます。

料金 /¥2,000 営業時間 /11:00 ~ 14:00、17:00 ~ 21:00 定休日/火曜日 電話 / 0226-25-9377 所在/宮城県本吉郡南三陸町歌津字管の浜48



旬のシラスと春つげ野菜、名産志津川ダ コと卵のこくがぴったりです。丼の底にも お楽しみが…!

料金 /¥1,500 営業時間 /11:00 ~ 19:00 定休日 / 水曜日 電話 /0226-46-3512 所在 / 宮城県本吉郡南三陸町志津川字御前下 59-1 南三陸さんさん商店街内



# 松原食堂



マグロ、ホタテ、カキ、ヒラメなど、春の地 元食材をたっぷり盛り込みました。

料金 /¥1,750 営業時間 /11:00 ~ 19:00 定休日 / 月曜日 ※祝日の場合は翌日 電話 /0226-46-2433 所在 / 宮城県本吉郡南三陸町志津川字御前下 59-1 南三陸さんさん商店街内





その日に水揚げされた地場産の 魚と、春を運ぶ青々とした菜の 花。目と舌でお楽しみください。

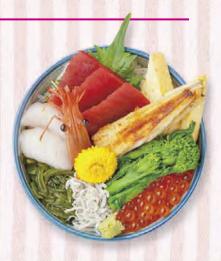
料金 /¥1,800 営業時間 /11:00 ~ 14:00、16:30 ~ 21:00 定休日/火曜日 電話 /0226-42-3351 所在/宮城県気仙沼市本吉町津谷新明戸 200

# <sub>寿司・御食事処</sub>たいしゅう



春の海、春の里…。その彩り豊かな具材 を丼の上で咲かせました。

料金/¥1,500 営業時間 /11:00 ~ 14:00、18:00 ~ 21:00 定休日/水曜日 電話 / 0226-36-2015 所在/宮城県本吉郡南三陸町歌津字峰畑54



**趣向を凝らした** ネタの数5 風 が運 々なぶ



3.1-4.30



弁慶鮨



丼の上は花畑。春野菜の緑と 海の幸の可憐な花のバラちら しです。

料金/¥1,700 営業時間 /11:00 ~ 14:00、17:00 ~ 21:00 定休日/木曜日 ※水曜日は昼のみ営業 電話 /0226-46-5141 所在/宮城県本吉郡南三陸町志津川字御前下59-1 南三陸さんさん商店街内



# 創菜旬魚 はしもと



はしもと名物、メカブの天ぷらがついてい ます。さまざまな食材が見事なハーモニー を奏でる春だけのキラキラ丼です。

> 料金 /¥1,500 営業時間 /11:00 ~ 14:00 / 17:00 ~ 22:00 定休日 / 火曜日 (月曜日は昼のみ営業) 電話 /0226-29-6343 所在 / 宮城県本吉郡南三陸町志津川字御前下 59-1 南三陸さんさん商店街内



# 山内鮮魚店静江



春のカキは旨みが濃縮されています。オ リーブオイルで焼き、とろみの中に旨みを とじ込めたリーズナブルな贅沢丼です。

料金 /¥1,000 営業時間 /11:00 ~ 17:00 定休日/日曜日 電話 /0226-46-2159 所在 / 宮城県本吉郡南三陸町志津川字沼田 150-35



- 春 (3月~4月): キラキラ春つげ丼
- 秋 (9月~10月): キラキラ秋旨丼



# 南三陸応援団」

団員募集中!

南三陸町では、これまで町においでくださったたくさんの皆様との絆をこれんからも大切に紡い でいきたいと考えています。町の復興のために、これからも末永く、南三陸町の人々との交流を 深めつつ、地域再生への活力を当町に注いでくださる「南三陸応援団」を募集しています。 「共に未来へ!」を合い言葉に、南三陸町の魅力を大きく育て、南三陸町民との交流と友情を深 めてください。「南三陸応援団」へのご登録を、心からお待ちしております。

# ■「南三陸応援団」特設サイトを開設します。

- ・4月中に特設サイトを開設します。特設サイトより、南三陸応援団にご登録く
- ・このサイトでは、南三陸町のまちづくり、地域活性、産業振興などの応援業務 に対する募集や、各地で開催される南三陸関連イベントについてお知らせします。
- ・また、皆様からお寄せ頂きたいご意見などをこのサイトを通じ、募集します。
- ・事務局から定期的に南三陸の「今」をお届けします。

# ■応援団特典「次はあなたの町へ!南三陸交流イベント」

- ・各地で応援団員の皆様と、南三陸との交流イベントを開催します。
- ・このイベントへは、団員登録を頂いた方に優先してご参加頂きます。
- ・イベントでは、南三陸自慢の味覚を楽しんだり、開催各地での南三陸トークイ ベントなども予定しております。
- ・イベントの開催告知や応募は、南三陸応援団特設サイト内で行います。

# ■応援団特典「今日から私も南三陸人!」

- ・全国各地で開催される復興イベントなどで南三陸スタッフとして一緒に活動し ていただきます。
- ・イベント支援スタッフとしてご登録頂き、実際に各地で活動してくださった応 援団員には、応援団限定のスタッフユニフォームをお渡しします。

「南三陸応援団」特設サイト開設に関するお知らせは、右記サイトで行いますので、 随時ご確認をお願いします。

# ■お問い合わせ

# TEL: 0226-46-4088

(南三陸町災害ボランティアセンター「南三陸応援団」準備室)

「南三陸応援団」特設サイト開設に関するお知らせは、 以下サイトで行いますので、随時ご確認をお願いします。



南三陸町災害ボランティアセンターホームページ

URL: http://minamisanrikuvc.com/



南三陸町公式ホームページ

URL: http://www.town.minamisanriku.miyagi.jp/



南三陸町観光協会公式ホームページ

URL: http://www.m-kankou.jp/

開催日 5月催行予定 開催場所 歌津白浜

歌津海しょくにん この一年海と漁について修業した『歌津海しょくにん』が、 内容

養殖業場見学と作業体験の講師を務めます。作業に適した汚れてもいい





まちのなか大学は、南三陸町 のすばらしい地域資源を伝え、 楽しみ尽くすための知識や話 術などについて学ぶ実践講座 です。高校生以上ならどなた でも参加できます。

お問い合わせ・お申し込みは 南三陸町観光協会

TEL 0226-47-2550 ^

4月18日(土)13:00-16:00

5月 9日(土)13:00-16:00

開催場所 南三陸ポータルセンター集合

講師 小野寺寛氏

内容 ツツジが満開の頃は、毎年多くの観光客が訪れ る田東山。この山の四季折々の魅力を伝える田東山案内人=

田東山マイスターを養成す る講座を行います。田東山 山頂までのバスルートの案 内を模擬練習。マイスター に認められた方には、5月 末から実際のツアーの案内 人をお願いする予定です。



モアーチョ

〈車で来られる方〉 仙台を含む各方面からのアクセスは下記高速経路図を参考にしてください。 仙台南ICから南三陸町までの所要時間は約120分です。



〈高速バスで来られる方〉 仙台駅から南三陸町間を結ぶバスが一日4本出ています。 柳津から南三陸町までの所要時間は約30分です。 ■臨時高速バス 仙台南三陸線【全線】(自由乗車制・予約不要)

【仙台発】◎乗車のみ/県庁市役所前[8:10-12:10-14:10-16:35] ⇒ 仙台駅前(宮交仙台高速/スセンター40番) [8:20-12:20-14:20-16:45] ◎降車のみ/南三陸ホテル観洋前[10:02-14:02 -16:02-18:27] ⇒志津川十日町[10:06 -14:06 -16:06 -18:31] ⇒歌津駅前[10:22-14:22 -16:22 -18:47] 【仙台行】◎乗車のみ/ 歌津駅前[6:52 - 8:32 - 10:32 - 16:22]⇒志津川十日町 [7:08 - 8:48 - 10:48 - 16:38] ⇒南三陸ホテル観洋前[7:12 - 8:52 - 10:52 - 16:42] ◎降車のみ/仙台駅前[8:58-10:38-12:38-18:28] ⇒ 県庁市役所前[9:04-10:44-12:44-18:34]

※志津川十日町、歌津駅前からの移動手段については、あらかじめ宿泊先などにご確認ください。

平成26年4月21日現在

# 〈JR・BRTでこられる方〉



※柳津・気仙沼間の BRT は上記以外の時間にも運行しています。 http://www.jreast.co.jp/railway/train /brt/pdf/data\_kesennuma.pdf

平成26年4月17日現在のものです。

# 南三陸町へのアクセス



詳しくは南三陸町観光協会ホームページで

http://www.m-kankou.jp/access/

http://www.m-kankou.jp/







